

〔第14回学術集会シンポジウム〕

様々な対象や活動による家族看護実践

1) 山口県立総合医療センター 2) 東京医療保健大学

大嶋満須美¹⁾ 中久喜町子²⁾

社会が「家族の絆」をあらためて重要視しはじめた現在、家族を一つの単位としてケアし、家族の相互作用による絆の強さを見いだすことは大きな意味があります。第14回日本家族看護学会シンポジウムでは、様々な場、多様な対象に対して、その専門性を発揮し活躍をされている方々から、家族看護の実践報告をして頂きました。5人のシンポジストの方々のご発言後、学会テーマ「家族と育ちあう家族看護」を軸として「家族に関わる意義」「家族看護のアセスメントの視点」「実践と看護職としての成長」の3項目について会場とディスカッションを行いました。

伊藤朋子氏は「核家族・少子化時代のマザーリング」と題して、核家族による家族力の低下と、また宮城県仙台市は転勤族が多いため地域の繋がりが弱いことを背景にあげ、育児支援を地域の仲間づくりの観点から行った取り組みと、家族を丸ごとケアすることを信条に24時間きめ細やかな体制で奮闘されている様子を報告してくださいました。

吉野尚一氏は、患者とその家族にとって外来看護師は「最初の医療者」として位置付けられ、短時間の関わりの中で病態の緊急度を判断するとともに家族の不安や緊張度をアセスメントし、その状況に適應できるよう働きかけ、ケアにあたる必要がある、と外来看護に期待される家族へのアプローチについてご発言をいただきました。

松野時子氏は「成人病棟における家族看護の実践報告」と題し、北里家族看護研究会のメンバー及び病棟の管理師長の立場でご発言をいただきました。その中で家族看護を実践することは患者・家族だけ

でなく、看護師にとってもメリットであること、また急性期を扱う医療現場でのスタッフの育成に研究会メンバーとともに取り組んでおられることを報告してくださいました。

中川孝子氏は「介護に消極的な家族に支援する粘り強いアプローチ」と題して、認知症のある老年介護者の家族を取り上げ、疎遠だった家族へ情報提供を行いながら、時間をかけ根気強く働きかけ、家族関係に潜むケアユニットのねじれを是正することで家族の行動変容を導き出した経過を報告してくださいました。

佐々木瑞穂氏は地域における家族支援を家族のQOLの向上と捉え、予防的に関わることの重要性と、同時に地域で長年関わることによって結果を目の当たりにするフィールド特性について報告された。また支援を開始する以前からの積み重ねが、家族支援には必要であることを示唆してくださいました。

5人のシンポジストはそれぞれの現場で家族に関わる意義とフィールドならではの課題について述べてくださいました。社会の変化とともに看護活動の場も多様化し、様々な領域や場において家族看護実践がなされています。家族の個別性を踏まえ、家族が主体としてエンパワーメント出来る関わりが必要です。見直されつつある家族の絆を家族自身が再発見する、あるいは強固にできるような専門職の関わりがますます重要になってきています。今回のシンポジウムを終え、そのように家族に向き合い、関わり続けることが看護職のアイデンティティを育み成長につながるものと確信いたしました。